小川原湖民族博物館旧蔵、幕末・明治漢詩文集５種解説

植　木　久　行[1]

序　　文

小川原湖民族博物館旧蔵資料調査の一環として、同博物館旧蔵書のうち、幕末・明治期に活躍した著名な３人、佐藤一斎（1772 ～ 1859）・斎藤拙堂（1797 ～ 1865）・重野成斎（1827 ～ 1910）の、各自の文業を示す漢詩文集、『愛日楼文詩』４巻（佐藤一斎撰）・『拙堂文集』６巻（斎藤拙堂撰）・『拙堂文話』８巻『続文話』８巻（斎藤拙堂撰）・『成斎文初集』３巻『成斎文二集』３巻（重野成斎撰）・『成斎先生遺稿』15巻（重野成斎撰）、この５種を取りあげて解説する。いずれの書物も、弘前大学附属図書館には未所蔵の書籍、なかでも『成斎先生遺稿』はやや稀覯本に属するらしい。

①　佐藤一斎撰『愛日楼文詩』４巻

〈外題〉愛日楼文一（～三）　愛日楼詩（附日光／山行記）四止（刷題簽）

〈内題〉愛日楼文一（～三）　愛日楼詩　附載／日光山行記

〈その他題〉見返題・序題・目録題…愛日楼文詩　　柱題…愛日楼文詩序　愛日楼文詩目　愛日楼文一（～三）　愛日楼詩　附載　　尾題…愛日楼文一（～三）愛日楼詩　附載

〈巻数〉文３巻・詩１巻、４冊

〈著編者〉幕末の佐藤一斎（名は坦）撰。文３冊は前鳥取新田（西館）藩主・松平冠山（池田定常）編（抄録）、詩１冊は小泉藩主・片桐遜斎（貞信）編（抄録）。（第１冊の文は下毛の菊池履（廓堂）校字、第２冊の文は備中の昌谷碩〔精渓、一斎３女の婿〕校字、第３冊の文は日向の荒川元校字、第４冊の詩は肥後の町野徳校字、附載の日光山行記は日向の荒川元校字。この４名はいずれも一斎の門人）

〈残欠状況〉完本　　〈保存状況〉ほぼ良好であるが、表紙は全体的に汚れ、第１冊の前部下端、第２冊の後部、及び第４冊の前部・後部には虫損あり。　　〈体裁〉袋綴　　〈丁数〉①56丁（序・目録・文巻１）、②52丁（文巻２）、③50丁（文巻３）、④66丁（詩１巻・附載）

〈写刊年時〉江戸末の文政12年（1829）序刊、後印〔一部に匡郭や文字の磨滅あり。早印本には本書のような刊記〔後述〕がない）

〈本文用字〉漢字。漢詩文には断句の点（小圏）が付される。　　〈法量〉縦22・５糎×横15・５糎　　〈匡郭〉左右双辺、縦18・０糎×横13・２糎　　〈一面行数〉９行19字　　〈版心〉小黒口（上端）、中黒口（下端）　　〈界線〉アリ　　〈表紙〉小豆色・卍繋　　〈書入〉附載（日光山行記）15丁表の下端部が磨滅し、３行目の下「…遥見一／礁…」の「一」を「暗」に誤記する（墨筆）。

〈刊記〉第４冊裏見返の四周双辺の枠内に、上下二段にわたって、大阪の河内屋喜兵衛以下の７書肆、西京の出雲寺文次郎以下の４書肆、東京の須原屋茂兵衛以下の11書肆を列挙した後、改行して「名山閣東京芝大神宮前書舗／和泉屋吉兵衛発售」という。　　〈蔵書印〉「樞〔？〕蔵／書印」（朱印）

[1] 弘前大学名誉教授・人文社会科学部客員研究員

〈備考〉本書の巻頭には、文政12年（1829）重陽後一日（9月10日）の日付を持つ、林述斎（名は衡、時に62歳）撰「愛日楼文詩叙」を収める。林述斎は寛政5年（1793）、幕命によって血統の絶えた幕府儒官の林家を相続し、第8代大学頭となり、昌平坂の聖堂学舎を幕府の学問所（昌平坂学問所）とした。老中松平定信とともに学制改革にあたった、林家中興の大儒である。一斎は4歳年上の彼に師事した。述斎の「詩叙」の後、「愛日楼文詩目」、そして本文（愛日楼文一）となる。

〈解　題〉

『愛日楼文詩』4巻4冊は、江戸時代後期の有名な儒学者・佐藤一斎（1772～1859）の詩文集（別集）の名。生存中の文政12年（1829）、58歳の時に刊行された。「今者（いま）　大道（一斎の字）は業已に成り、名も亦た馳す。王侯大人争いて相延致し、以て之を師崇し、往々にして民政・国是を問及す。…　夫（か）の大道の学術の深造、文章の精練のごときは、世に自から公論有り。余の言を俟たず」（林述斎撰「愛日楼文詩叙」）。

本書第1冊は序16首（「呉氏校本四書章句集註序」「先哲叢談序」「刻四庫全書簡明目録序」他）・記12首（「行余館記」「六間堂記」「不破関址立石記」他）、第2冊は論2首（「李泌論」他）・弁2首（「弟子門人非二弁」他）・墓銘14首（「故二城留守小出君墓誌銘」「古河教授鶴城恩田君墓碣銘」「伊能東河墓碣銘」他）・墓表1首（「一斎成瀬府君墓表」）・碑陰記1首（「殤女希楚碑陰記」）・行状1首（「先府君行状」）、第3冊は説6首（「迪斎説」「達而已斎説」他）・題跋11首（「跋元槧聯珠詩格」「王文成公真蹟跋」「題護園讌集図」「桜花譜跋」他）・雑著8首（「癸亥春月茅堂小集」「記洋製測時器」他）・遊記2首（「小金井橋観桜記」「杉田村観梅記」）・賦4首（「錦屏海賦」「愛日楼賦」他）・賛10首（「包犠氏像賛」「諸葛武侯賛」「惺窩先生賛」他）・銘5首（「時辰表銘」「茶室銘」他）。文の合計は95首。

第4冊は古今体詩234首（「中元楼上玩月二首」「秋懐四首」「西肥客中」「春夕」「落葉」「悼亡三首」「春尽」「季夏天瀑先生巽園」「題春川釣魚図、為菅茶山作」「長夏上澣従樫宇林君遊谷墅、分緑陰幽草勝花時句為韻、得草花字」「冠山老侯得月亭、分得楼字」「雷雨絶句」「太公垂釣図」「中秋泛琵湖」「歳晏有感」「二月初吉、墨上散策」「忍岡花下口号」他）、附載「日光山行記」（文政1年の旅行記）。

撰者の佐藤一斎、名は坦、字は大道、通称は捨蔵、一斎・愛日楼・老吾軒などと号した。父の信由は美濃岩村藩の家老。一斎は江戸の藩邸に生まれ、4歳年長の藩主（松平乗蘊）の子、後の林述斎（林家中興の大儒、1768～1841）と親しく交遊し、ともに学問に励んだ。19歳のとき、藩主（松平乗保）の近侍となったが、翌年免職。藩籍の離脱を許され、関西に遊んで懐徳堂の中井竹山に師事した。寛政5年（1793）22歳のとき、第7代大学頭・林信敬（簡順・錦峰）の門に入って、その邸内に住む。この年、信敬が急逝し、幕命によって林述斎が林家第8代大学頭を嗣ぐと、一斎はそのまま述斎の門人となり、師弟の契りを結んだ。二人の親交は終生変わらず、文化2年（1805）34歳のとき、一斎は林家の塾長となり、名声が高まるにつれて門人が増加した。述斎が没した天保12年（1841）70歳のとき、始めて召し出されて幕府の儒臣となり、昌平黌（昌平坂学問所）の官舎に移る。この後、昌平黌で講説しつつ、将軍はじめ諸大名に招かれて講義し、幕府の文教を司った。安政6年（1859）9月、昌平坂の官舎で病没、享年88歳。朱子学・陽明学を兼採した、彼の宋明性理学に関する学殖は当代随一であったという。「言志四録」（『言志録』『言志後録』『言志晩録』『言志耋録』）の随想録は広く知られる。

「愛日楼文詩目」の末に付す、松平冠山（池田定常）の文政12年の識語にいう。

> 一斎先生の文詩の稿本は、数十巻を累ぬる有り。余嘗て借読し、其の文を鈔して三冊を成す。小泉侯（片桐遜斎〔貞信〕）も亦た詩一冊を鈔す。今　合せて一集と為す。末に又た「日光山行記」を以て附す。往者（さきに）、先生に請い、活字を用いて刷印し、諸（これ）を社友に頒たんと欲す。既に傭工に命ずるも、工人遷延して、年を経て果たさず。熊本藩に沢村薦士寛（士寛は字）なる者有り。頃（このごろ）先生に請いて曰く、「活版（速効性と経済性に富む活字本）は、整版（耐久性と美しさを持つ木版本）の永存して公溥（普及）すべしと為すに如（し）かず。盍ぞ今に及んで図（計画）を改め、薦をして其の事を任わしめざる」と。先生曰く、「活版にて足れり。公溥を必とせざるなり」と。士寛は又た余に就いて謀り、懇懇として已まず。余は其の志の厚きを善みし、為に代わりて之を請うこと再三にして、先生乃ち許さる。因り

て遂に完帙を以て之を士寛に付して刻せしむ。／文政十二年己丑三月／冠山松平定常拝して言う。

これによれば、前鳥取新田（西館）藩主・松平冠山（池田定常）は、一斎撰『愛日楼文詩』の出版事業を進めたが頓挫した。そこで一斎の塾生・沢村の提案（整版への変更）を受け入れ、その許可を一斎から取り付けた。かくして沢村の指図で文政12年（1829）に刊行された（校字者は菊池履以下の4人）。

「『愛日楼文詩』は文政十二年の作までを収録しているから、二人〔冠山と遜斎〕が『嘗て』書き抜いた鈔本四冊がそのまま『文詩』として刻されたのではない。『文詩』の刪定は、上木直前まで行なわれたのである」（荻生茂博「『愛日楼全集』解説・解題」）。松平冠山が刊行資金を援助したのであろう。松平冠山（池田定常、1767～1833）は、5歳年下の一斎のもとで40余年間研鑽し、古今和漢の書に通じて、寛政年間以降、佐伯藩主毛利高標・仁正寺藩主市橋長昭とともに、文学の三侯（三大名）と称された人である。林述斎・松崎慊堂・市河寛斎・滝沢馬琴ら多くの文人と交遊し、享和元年（1801）、35歳で隠居した後も、江戸で読書と著述に明け暮れた。

本書の出版経緯については、林述斎の「愛日楼文詩叙」にも、「曩者（さきに）、冠山老侯は小泉侯と相い謀り、将に活字を以て大道（一斎の字）の文詩鈔を刷らんとす。熊本藩の沢村生（邁）、家塾に在りて、諸（これ）を整版に改雕するを請う。剞劂成りて、余に一言以て之を証すを索む」という。沢村邁（1800～1859）、字は士寛、通称は宮内、号は西陂、熊本藩士。江戸に出て一斎の塾で学び、帰藩後、藩校の助教となる。

「愛日楼詩」の末に、一行あけて付された片桐遜斎（名は貞信、小泉藩主、1802～1848、一斎より30歳年少）の識語にいう。

> 一斎先生の詩は、今代の詩人の為る所と撰を異にす。惟だ志を言い実を叙ぶるを尚び、浮華の虚詞を喜ばず。余嘗て其の稿本を借覧し、鈔して一冊を得て、以て帳秘（秘蔵書）と為す。属者（このごろ）　冠山老侯（松平冠山）余に慫慂し、其の鈔する所の文三冊と合し、并せて一集と為し、以て学ぶ者の模範と為さんと欲す。余は乃ち敢えて秘せず、別に一本を録して之に贈る。戊子（文政11年）端午の翌日（5月6日）、遜斎片桐貞信敬んで識す。

佐藤一斎には、文化8年（1811）に成る未刊の詩文集『一斎浄稿』4冊（雑文70首と古今体詩・詩余307首所収）が現存する（国立国会図書館蔵）。荻生茂博「『愛日楼全集』解説・解題」にいう、「一斎自筆の多数の推敲や、題毎につけられた圏点等の（幾重にも重ねられた）書き入れがある」ため、「『一斎浄稿』の選は、一斎自身が述斎や松崎慊堂、三谷慎斎らとの協議をへて、一門の大がかりな事業として行ったのであり、『文詩』の作成過程も同様であった」。『文詩』の選定における「述斎の関与は（一斎の詩に対する批評『〔一斎稿本〕』3冊〈東京都立中央図書館河田文庫蔵〉から推定すれば）想像以上に深く、『浄稿』『文詩』は一斎・述斎の共選といってさしつかえな」く、「『文詩』は、冠山・遜斎の私的な選ではない」と指摘する（要約）。

江戸後期、文章家として「西に（頼）山陽あり、東に（佐藤）一斎あり」と並称されたが、両者の文体は対照的で、頼山陽は闊達奔放、佐藤一斎は端正精緻であった。佐藤一斎の継嗣・佐藤榥（号は立軒、1822～1885）撰「皇考故儒員佐藤府君行状」（文久元年〔1861〕5月の作）は、詩文の創作姿勢に言及する、「先子（亡父・一斎）文を作るに、（唐宋）八家を以て法（手本）と為し、尤も韓（愈）欧（陽修）を貴び、明に於いては則ち王文成（陽明）を学ぶ。一文を作らんと欲するごとに、必ず先ず或いは坐し或いは臥し、以て精神を養い気力を畜えて、予め其の趣向を立つ。…　而して後に始めて筆を起こす。是に於いて千言立ちどころに成る。然りと雖も、句々字々、法を古人に取りて、其の精密を極め、改めて又た改め、殆ど十日を経て後、初めて稿を脱す。…　詩のごときは則ち先子の任（にな）わざる所なり。然れども其の精練（推敲）は文を作るに異ならず。文は能く意を達し、詩は能く志を言う、此くのごときのみ」と。

また受業の弟子・若山拯（号は勿堂、美濃岩村藩儒・昌平黌儒官、1802～1867）撰「惟一佐藤先生墓碣銘」（文久2年〔1862〕3月の作）にも、「其れ古人の文に於いては、尤も韓（愈）欧（陽修）を重んじ、明に於いては則ち王文成（陽明）を貴ぶ。一篇を作るごとに鍛煉すること十日、然る後に成る。故に精密にして疵無し。詩賦のごときも亦た然り」という。

〈参考文献〉

・高瀬代次郎『佐藤一斎と其門人』（南陽堂本店、1922年）
・田中佩刀「改稿・佐藤一斎先生年譜」（『明治大学教養論集』69巻、1972年所収）
・富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（麦書房、1966年）
・富士川英郎「愛日楼詩の解題」（『愛日楼詩』〔内閣文庫本〕の影印本〔『詩集　日本漢詩』第16巻〈汲古書院、1990年〉所収〕）
・中村安宏「『愛日楼文詩』の考察」（二松学舎大学陽明学研究所刊『陽明学』第3号、1991年所収）
・荻生茂博「『愛日楼全集』解説・解題」（『近世儒家文集集成』第16巻〔愛日楼全集〕、ぺりかん社、1999年所収）
・五弓豊太郎（名は久文、号は雪窓）編『事実文編』（国書刊行会、1911年）巻58に収める、若山拯撰「惟一佐藤先生墓碣銘」・佐藤榥撰「皇考故儒員佐藤府君行状」

②　斎藤拙堂撰『拙堂文集』６巻

〈外題〉拙堂文集　中内惇編　一（～六）（刷題簽）
〈内題〉拙堂文集巻之一（～巻之六）
〈その他題〉見返題・凡例題・目録題・柱題…拙堂文集　尾題…拙堂文集巻之一終（～巻之六終）
〈巻数〉６巻、６冊
〈著編者〉幕末の斎藤拙堂（名は正謙、字は有終）撰、中内惇編
〈著作注記〉各巻内題２行目に「斎藤正謙有終著　門人 中内惇編次」とある。ちなみに第一冊の見返に「門人中内惇編次／拙堂文集／斎藤氏蔵版」、巻末の刊記（版権免許）に「著者　古人　斎藤拙翁／編者　三重県士族　中内　惇」とある。拙翁は拙堂の致仕後の称呼。
〈残欠状況〉完本　〈保存状況〉やや不良。第１冊の表紙は色落ちし、題簽の一部を失う。第１冊と第６冊の表紙には虫損あり。第３冊は末尾の版心のほか、第４丁から第９丁にかけて特に大きな虫損あり。第４冊には虫損が散在し、第６冊の前部と後部に大きな虫損あり。また第４・第６冊の綴じ糸が切れる。
〈体裁〉袋綴　〈丁数〉①90丁（序・小伝・凡例・目録・巻１）、②58丁（巻２）、③62丁（巻３）、④47丁（巻４）、⑤54丁（巻５）、⑥70丁（巻６・跋・刊記）
〈写刊年時〉明治14年（1881）７月刊　〈本文用字〉漢字。漢文には断句の点（小圏）と返り点を付す。
〈法量〉縦22・６糎×横15・２糎　〈匡郭〉四周双辺、縦16・４糎×横10・３糎　〈一面行数〉10行22字　〈版心〉白口、単黒魚尾　〈界線〉アリ　〈表紙〉浅葱色・菊花文亀甲繋　〈書入〉「楠木誌序」（巻３）の欄上に、この序文を草稿かと疑う朱筆あり。
〈刊記〉第６冊の巻末…「版権免許　明治十三年九月十八日／同十四年七月上旬刻成　／著者　古人　斎藤拙翁／編者　三重県士族　中内　惇〈伊勢国安濃郡津東撿校町十三番地〉　／出版人　同県士族　斎藤次郎〈同国同所丸之内六番地〉　／発兌人　同県平民　豊住伊兵衛〈伊賀国阿拝郡上野中町廿八番地〉　／同　豊住支店〈大阪東区備後町四丁目四十番地〉」

ちなみに刊記の後には、「三府諸県弘通書林」として、二段構成で「東京　山中市兵衛」以下10書肆、「大阪　柳原喜兵衛」以下10書肆、「西京　田中治兵衛」以下12書肆、さらに名古屋・大垣・岐阜以下、伊賀名張・伊賀上野に到る各地の書肆59の名（「豊住伊兵衛梓」を除く）を列挙する〈販売所は全91軒、紙数は２丁分〉。

第１冊の見返（朱色）に、「門人中内惇編次／拙堂文集／斎藤氏蔵版」とある。この斎藤氏は、刊記中の「出版人　斎藤次郎」を指す。斎藤次郎は拙堂の長子・斎藤誠軒（名は正格、1826～1876）の子。名は正彰、字は有常、誠斎と号した。二松学舎に入って三島中洲（拙堂の門人）に学ぶ。二松学舎の講師となり、のち津市高等女学校の教諭となった。大正７年、55歳没（1864～1918）。次郎は通称である（近藤春雄『日本漢文学大事典』斎藤誠斎の条）。　〈蔵書印〉「新清庙〔？〕」（朱印）
〈備考〉巻頭の２丁に藤堂高猷（たかゆき）執筆「百代／山斗」の題字がある。藤堂高猷（1813～1895）は幕末・明

治初の伊勢津藩主（第11代）。拙堂は彼の13歳の時、侍読となって以降十数年、漢学を指導し、高猷は侍読をやめた後も長く拙堂を信任した。高猷は明治28年没のため、本書の出版（明治14年）当時、健在であった。続いて拙堂の門人･伊勢の中内惇撰「序」（明治14年〔1881〕4月）、中内惇撰「拙堂先生小伝」（明治13年10月）、中内惇撰「拙堂文集凡例」（明治13年8月）､「拙堂文集目録」を載せた後、本文（『拙堂文集』巻1）となる。第6冊巻6の巻末には、長谷部円祁撰「跋」（明治14年5月）がある。ちなみに中内惇は、拙堂編撰『月瀬記勝』（月瀬観梅の紀行詩文）刊行（嘉永4年〔1851〕、津藩有造館蔵版）の際に、拙堂の依頼を受けて「序」を書いた、優れた門人であった。

〈解　題〉

『拙堂文集』6巻6冊は、幕末の有名な儒学者・斎藤拙堂（1797～1865）の文章350篇を収めた漢文集の名。拙堂の没後16年（明治14年）、拙堂の門人・中内惇（号は樸堂、1822～1882）の編纂で刊行。広く読まれて、その様式は明治の「文集」ブームの模範になったという。中内惇は『拙堂文集』刊行の翌年（明治15年12月）、61歳でに没した。彼は、拙堂の墓誌作成の約束を果たさず、明治13年、64歳で没した土井有恪（号は瞽牙、拙堂の門人）に代わって、「拙堂先生小伝」を著した。彼が最も忠実な拙堂の門人とされるゆえんである。

中内惇撰「序」（刻成りし後の明治14年5月）の一節には、単独で『拙堂文集』を編纂した経緯に言及する。

先生（拙堂）没して数年の後〔明治2年〕、致卿（拙堂の長子・斎藤正格〔号は誠軒〕の字、中内惇より4歳年少）、（藩校有造館の）督学と為り、余を薦めて督学の事を参署せしむ（督学参謀となる）。余乃ち（伊賀より）津城に帰り、日び致卿と学校（有造館）に相い見て、甚だ歓ぶ。致卿は時に先生（拙堂）の遺文を刻するの志有り。然れども軍国多事、倥偬として日を渉り、故を以て未だ暇あらざるなり。已にして（明治4年7月）藩は廃され学校は閉づ。余は致卿と倶に職を解かれ閑を得て、寿梓（授梓、書物の出版）の挙を謀る。会(たまた)ま朝廷、旧藩主に命じて奕世の事蹟を録上せしむ。因りて旧主（藤堂高猷）の命を受けて、致卿と倶に藤堂氏の事蹟を編纂すること若干巻、故を以て又た未だ暇あらざるなり。致卿は嘗て余に謂いて曰く、「（藤堂氏事蹟の）編纂既に畢れば、則ち当に速やかに寿梓の挙を果たすべし」と。図らざりき、致卿は一旦（明治9年）溘焉として余を棄てり。而して余は独り其の責を任うなり。嗟乎、余は既に先生の洪恩を受け、又た致卿と交わり甚だ厚し。余にして努力せざるは可ならんや。是に於いて致卿の女婿･長谷部円祁と謀り、書肆の豊住生（伊賀上野の豊住伊兵衛）の請いを許して、遂に遺文を編次し、勒（編纂）して六巻を成し、題して『拙堂文集』と曰い、其の版を斎藤氏（致卿の子・斎藤次郎）に蔵す。…　致卿、未だ没せざる時、稍や手を下すと雖も、其の編次は猶お未だ定まらず。故に余は致卿に代わりて之を編次す。

中内惇撰「拙堂文集凡例」の中から4条を挙げて、編纂方針を確認する。

○先生の原稿は、錯雑して次序無し。又た多く年月を記さず。故に其の先後は弁(わか)ち易からず。今　先生の履歴を推し、略ぼ其の先後を叙(つい)で、以て之を編次す。然れども未だ其れ倒置無しを保（保証）せず。

○先生の文は、散佚尠(すくな)からず。予の記する所を以てすら、猶お数十首を下らず。況んや其の他をや。今は唯だ其の家（拙堂の長子・斎藤正格の家）に存する者を収むるのみ。異日に獲る所は、当に之を拾遺に録すべし。

○月瀬記勝・海外異伝は並びに世に行わる。また京華游録・客枕夢游録・南游志のごときは、亦た将に之を刊行せんとす。故に皆な此に載せず。

○先生の詩集も亦た、若干巻有り。本(も)と文と同に刻して『拙堂全集』と為さんと欲す。但だ資力未だ足らず、姑く他日を竢つ。

要するに中内惇編『拙堂文集』は、拙堂の長子・斎藤正格（字は致卿、1826～1876）の家に所蔵する拙堂の文章を諸体に分類し、一類の中はほぼ作成順に並べた漢文集である。斎藤正格の女婿・長谷部円祁の「跋」（明治14年）も、編纂経緯を知る参考になろう。

吾が師・樸堂夫子（中内惇）は、拙堂先生の高足弟子なり。嘗て祁（円祁）に謂いて曰く、「先生の文章は寔に一代の大家たり。是を以て世人は多く其の遺文の出づる者を待つ。今にして刊行せずんば、其の責めは必ず我に帰せん。汝其れ吾が為に之を勉めよ」と。祁は謹んで命を奉じ、即ち斎藤氏（斎藤正格の家）に之き、筐中の遺文を検ぶ。散佚甚だ多く、且つ厖雑にして倫次（順序）無く、遽かに手を下し難し。然れども吾が師（中内惇）は其の労を憚らず、拮据（忙しく活動・疲労）すること年を経て、整理・編録し、分かちて六巻と為し、祁をして之を校せしめ、之を剞劂氏（刻工）に授く。

本書巻１（第１冊）は記 52 首（「拙堂記」「稽古精舎記」「玉池吟榭記」「愛雲楼記」「順正書院記」「皆梅園記」「躑躅園記」他）、巻２（第２冊）は記 13 首（「遊長谷山記」「山房観楓記」「陪游笠置山記」「下岐蘇川記」他）・書８首（「与頼山陽書」「与猪飼敬所論学術書」「与某生論文書」他）・序 21 首（「韓子新編序」「古詩大観後序」「夜航詩話序」「夢鶴唱和巻序」「影本資治通鑑序」「小竹斎詩集序」他）、巻３（第３冊）は序 66 首（「伊勢国司記略序」「先哲叢談後編序」「経世文編抄序」「牧民心鑑解序」「重刻文体明弁序」「竹外絶句序」「煎茶集説序」「平城大内敷地図序」他。ただし「拙堂文話序」「続文話序」「続詩醇序」「鉄研余滴序」の４首は目録中に名を載せるが、当該書に見えるとして文集中には本文を未収録。従って序 66 首は実質、62 首となる）・引５首（「僊桃詩画帖引」「日本智嚢引」他）。

巻４（第４冊）は策２首（「養才策」他）・論 11 首（「范蠡伍員孰優論」「上杉謙信論」「張居正論」他）・弁 15 首（「湯武放伐弁一（～四）」「屈原投汨羅弁」「老子弁一（～五）」「孫子弁」他）・説７首（「豢龍説」「烟草説」「捕鯨説」他）・喩３首（「雲喩」「雪喩」他）、巻５（第５冊）は碑５首（「松本埼紀功碑」「天王山碑」他）・誌銘 32 首（「津藩故番頭藤堂君墓誌銘」「津藩故国老兼国校総教藤堂君墓誌銘」「亡友阪井公実墓銘」「小竹先生墓碣銘」「服文稼墓碣銘」他）・墓表６首（「柳井六郎大夫墓表」「津藩故督学兼侍読石川君墓表」他）、巻６（第６冊）は伝３首（「高山彦九郎伝」他）・賛８首（「韓魏公像賛」「孔子賛」「韓文公賛」他）・銘７首（「栗斎銘」「琴室銘」「茶室銘」他）・文２首（「弔今川義元文」他）・読３首（「読菅右府伝」「読通鑑評」他）・書後９首（「書巻氏正隷千字文後」「書中内五惇杞憂談後」「書徐子与真蹟後」他）、題 30 首（「題管鮑行賈図」「題唐十八学士図」「題万国地球全図」「題魯西亜舩図」「題仇英桃源図」他）・跋 38 首（「国校学則跋」「三国通覧附補遺跋」「東韃紀行跋」「翻刻資治通鑑跋」「池大雅輞川図巻跋」他）・雑著８首（「続獲麟解」「擬豊太閤征韓檄」他）。「拙堂文集目録」の「文は凡て三百五十四首」は、実質上、350 首を収めることになる。文章の大家らしく、多様な文体を自在に駆使して内容は多彩である。

撰者の斎藤拙堂、名は正謙、字は有終、通称は徳蔵、拙堂・鉄研学人などと号し、致仕後、拙翁と称した。伊勢津藩の江戸藩邸で生まれ、昌平黌に入って古賀精里に学び、古文の作成に努めた。文政３年（1820）24 歳のとき、創設された津藩藩校・有造館の学職（句読師）に抜擢されて、津（三重県津市）に移住する。講師に昇進して、藩主藤堂高猷の侍読を兼ねた。天保 12 年（1841）、郡奉行となって治績をあげた後、藩校に帰り、弘化元年（1844）48 歳のとき、有造館の第３代督学（校長）となって 15 年間在任し、文武の学政を総攬して育英に努めた。学則を改正し、文庫の増設や武場の開設、『資治通鑑』の校刊等、藩版事業を推進し、江戸に藩士を派遣して洋学・兵法・砲術を学ばせ、種痘館を開設した。

中内惇撰「拙堂先生小伝」にいう、「才識は明達、学は古今に通ず。経義は宋儒に本づくと雖も、亦た之を墨守せず、参（まじ）うに諸説を以てす。…　諸史は淹貫せざる莫く、最も史漢（『史記』『漢書』）に精しく、発明多し。老子・孫子の二弁は、猪飼彦博（敬所）称して以て千古の卓見と為す。文は則ち少壮にして既に荘（周）・馬（司馬遷）・韓（愈）・欧（陽修）の神髄を得たり。詩は則ち中歳にして始めて力を用い、晩に及んで杜（甫）・蘇（軾）の堂に升る。頼襄（山陽）・古賀煜（侗庵）・野田逸（笛浦）・安積信（艮斎）・篠崎弼（小竹）等は、既に其の文を推服す。梁緯（梁孟緯？　梁川星巌）・広瀬謙（旭荘）・鷹羽龍年（雲淙）・藤森大雅（天山）等は、又た其の詩を称賛す。之を要するに、詩は猶お敵手有るも、文に至りては、詢に独歩たり」と。

拙堂は「学に根柢有りて、文を作るを喜ぶ。年力方に壮んにして、叙事・論事は皆な能く其の胸臆を行いて、古えの格法に合す」（頼山陽『拙堂文話』序）と評された、卓越した文章家である。拙堂編撰

『月瀬記勝』は頼山陽の「耶馬渓図巻記」と並んで紀行文の双璧とされ、拙堂の名を高めた。「拙堂の文章は山陽のそれほど奔放ではない反面、堅実であり、識者の間ではしばしば山陽以上という評価を得ていたようである」（富士川英郎『江戸後期の詩人たち』）。

ちなみに、編次者・中内惇（1822～1882）は幕末・明治の、伊勢（三重県）の人。名は惇、字は五惇、号は樸堂・柳山。津藩士島川宗之の子で、中内氏を嗣ぐ。12歳で拙堂の門に入って学び、弘化1年（1844）、津の藩校・有造館の学官、嘉永1年（1848）伊賀上野の学問所・崇広堂の講師となって、伊賀に移住した。明治3年（1870）津に帰り、有造館督学参謀となる（当時の督学〔2人制〕の1人は拙堂の長子・斎藤正格）。明治4年の廃藩後、豊受大神宮主典・津中学教員などを歴任した。明治15年没、享年61歳。『樸堂詩鈔』3巻がある（近藤春雄『日本漢文学大事典』中内樸堂の条）。

〈参考文献〉

・近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、1985年）
・津市教育会編『津市文教史要』（津市教育会、1938年）
・富士川英郎『江戸後期の詩人たち』（麦書房、1966年）
・『日本教育史資料』4（文部省総務局、1891年）に収める、巻11、学士小伝・旧津藩の条

③　斎藤拙堂撰『拙堂文話』8巻・『続文話』8巻

〈外題〉拙堂文話　一（～二）　続文話　一（～二）（刷題簽）
〈内題〉文話巻一（～巻八）　続文話巻一（～巻八）
〈その他題〉『拙堂文話』―　見返題・序題…拙堂文話　柱題…文話　尾題…文話巻一（～巻八終）　『続文話』―　柱題…続文話　尾題…続文話巻一（～巻八終）
〈巻数〉『拙堂文話』…8巻2冊　『続文話』…8巻2冊
〈著者〉幕末の斎藤拙堂（名は正謙、字は有終）撰
〈著作注記〉『拙堂文話』・『続文話』とも、各巻内題2行目に「津藩斎藤謙有終著」とある。斎藤謙は斎藤正謙の修名。ちなみに『拙堂文話』第1冊の見返には、「斎藤先生著／拙堂文話／古香書屋版」とある。
〈残欠状況〉完本　〈保存状況〉やや不良。表紙はいずれも汚損し、綴じ糸がほつれ切れているが、書中の文面は綺麗である。　〈体裁〉袋綴　〈丁数〉『拙堂文話』…①77丁（序・自序・巻1～4）、②70丁（巻5～8）『続文話』…①68丁（自序・巻1～4）、②66丁（巻5～8、跋・「文海堂製本翻訳医書略目録」）
〈写刊年時〉『拙堂文話』は幕末の文政13年（1830）刊、『続文話』は天保7年（1836）刊。ちなみに『続文話』第1冊の見返には、本来「拙堂先生著／続文話／製本所　不自欺斎」とあり、この3行を囲む枠上に「天保丙申新鐫」（横書）の刊年が刻されていた（天保丙申は天保7年。日本古典籍データベース所収の版本参照）。本書は本来別々に刊行された2書を合印したため、『続文話』の見返が省略されたのであろう。しかも本書は界線・匡郭・文字の磨滅した箇所がある後印本である。〈本文用字〉漢字。漢文には断句の点（小圏）と返り点、及び簡略な送り仮名を付す。ただし『続文話』は、『拙堂文話』とは異なって送り仮名を欠く。
〈法量〉縦22・1糎×横15・5糎　〈匡郭〉左右双辺、縦15・4糎×横10・7糎　〈一面行数〉10行20字　〈版心〉白口、単黒魚尾　〈界線〉アリ　〈表紙〉小豆色・卍繋
〈刊記〉『拙堂文話』第1冊の見返には「斎藤先生著／拙堂文話／古香書屋版」とあり、この3行を囲む枠上に「文政庚寅新鐫」（横書）と刻す。文政庚寅とは文政13年（本年12月、天保1年となる）。ちなみに『拙堂文話』第2冊の裏見返に、三都書物問屋（江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛以下、9書肆名を列記）や、書林（京都寺町通仏光寺　河内屋藤四郎以下、11書肆名を列記）の刊記を付す版本も伝わるが、本書には見えない。他方、『続文話』中には、すでに述べたように、第1冊の見返に「拙堂先生著／続文話／製本所　不自欺斎」とあり、この3行を囲む枠上に「天保丙申新鐫」（横書）と刻された版本も伝わるが、本書には見えない。本書『続文話』第2冊の裏見返には「書林（横書）大阪心斎橋筋一丁目／松村

九兵衛」とある。　〈蔵書印〉「廣田／蔵書」（朱印）

〈備考〉『拙堂文話』の巻頭には、文政13年（1830）２月９日の頼襄（山陽）の「序」、文政13年良月（10月）下旬の古賀煜（号は侗庵・紫溟、1788～1847、古賀精里の子）の「拙堂文話序」、文政13年（1830）閏３月の「津藩の侍読　斎藤謙」（斎藤正謙の修名、拙堂）の自序を載せた後、本文（『文話』巻１）となる。『続文話』には天保８年（1837）９月10日の「鉄研学人斎藤謙」の「自序」と、「浪華の松竹散人　筱崎弼書す」という篠崎小竹（名は弼、1781～1851）の題記があり、この後、本文（『続文話』巻１）となる。そして巻末（「続文話巻八終」の後）には、受業の門人・土井有恪が謹みて識した、「文話正続十六巻」に対する跋文（天保６年〔1835〕９月）がある。撰者の土井有恪（1817～1880）、字は士恭、号は聱牙、経義を石川竹厓（名は之褧）に、文章を斎藤拙堂に学ぶ。21歳で有造館助教、続いて講師となり、弘化２年（1845）には『資治通鑑』校刊総裁となる。詩文書画を善くし、文宗と仰がれた。この跋文は19歳の時の執筆である。

〈解　題〉

『拙堂文話』８巻・『続文話』８巻は、幕末の有名な儒学者・斎藤拙堂（1797～1865）が、漢文の変遷や漢文の作法、日中両国の文章家に対する論評等を漢文で記した書籍の名（その漢文には断句の圏点と返り点、及び簡略な送り仮名が付される。ただし『続文話』は送り仮名を欠く）。

正編の『拙堂文話』は、上古から近世に及ぶ日本漢文の淵源と変遷を述べ、荻生徂徠・伊藤仁斎などの文章にも言及する。中国に関しては、古代から明清期に到る文章を広く取りあげて評論する。明代の古文辞派の文章、それを批判して興った袁宏道などの文章を論評し、韓愈・柳宗元・欧陽修・蘇軾など、唐宋八大家を論評し、『史記』『荘子』など、秦漢の古文にも言及し、文章を実際に綴る際の留意点なども指摘する。続編の『続文話』は、主に中国の歴代、特に明清期の諸家の名文や文章論を具体的にあげて解説し、有名な文章家・柳宗元の「柳柳州年譜」を作る。

正続『文話』の中から、道徳・道義を重視する、拙堂の載道的文章観を述べた条をあげる。

○李性学曰く、「経伝は皆な聖賢　道を明らかにして世を経（おさ）むるの書。文を作る為に設くるに非ずと雖も、千万の世の文は、是れより出づ」と。余謂えらく、後世の文は、苟くも能く道を明らかに世を経めば、則ち聖賢の用心と同じ。豈に復た古今の異有らんや。彼の徒らに辞句工麗を以てする者は、何ぞ与に之を語るに足らんや。葉水心（南宋の学者、名は適、水心は号）云う、「文は世道（社会〔の状況や気風〕）に関わらざれば、工みなりと雖も益無し」と。善きかな之を言うや。（『文話』巻５）

李性学の語は、南宋の李耆卿撰『文章精義』（別名…臨川の李性学撰『古今文章精義』）の冒頭に見える「易・詩・書・儀礼・春秋・論語・大学・中庸・孟子、皆聖賢明道経世之書。雖非為作文設、而千万世文章従是出焉」に基づく。李耆卿は臨川の人、名は塗、字は耆卿。性学は号で、朱子学者らしい。

○聖賢の道術（学説）は、文に非ざれば明らかならず。古今の事業は文に非ざれば伝わらず。故に古人は以て貫道の器と為す。又た以て経国の業と為す。文の以て已むべからざるは、是くのごときかな。清の胡天游曰く、「古今の人は皆な死す。唯だ文章を能くする者は死せず。聖賢・豪傑有りと雖も、文章を離るれば、則ち其の人皆な死す」と。天游の此の言は、圭角有るを免れずと雖も、然れども論は実に痛快なり。（『続文話』巻８）

拙堂はまた、古文を理想とし、唐宋八家の古文から入って秦漢の古文に遡ることを勧め、唐の韓愈の文章を高く評価した。

○文は当に唐宋を以て門階（入口）と為し、秦漢を閫奥（奥室）と為すべし。唐宋を以て門階と為さざれば、則ち陥りて闇渋と為れり。秦漢を以て閫奥と為さざれば、則ち流れて平弱と為れり。（『文話』巻３）

○韓子（韓愈）の文は、前に古人無く、後に継ぐ者無し。唐より漢に至る千有余年、惟だ太史公（司馬遷）有りて之が耦（たぐい）と為るのみ。…（『文話』巻３）

受業生・土井有恪の跋文（天保６年〔1835〕）の冒頭には、本書を執筆した拙堂の意図を推察していう。

右、文話正続十六巻は、我が拙堂先生　近世の文弊を憂えて作る所にして、恪（有恪）をして秦文卿と校し、且つ之に跋せしむ。恪窃かに謂（おも）えらく、文の弊は久し、近世甚だしと為すと。故に人は以て小技と為さざれば、則ち之を末芸と謂う。此れ徒らに其の外を見て、其の中を知らざる故なるのみ。苟くも文の外に止まらざるを知らば、豈に縦ままに其の弊に任すべけんや。但だ其の弊は深し。有力者に非ざれば、孰か能く矯めて之を直さんや。

笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』「三　藩版･藩校版と教育文化」の章には、「文政中（文政･天保中？）、津藩有造館で上梓した拙堂文話（正続）十六巻四冊は、督学（当時まだ講師）斎藤正謙の撰したもので、わが国漢文の淵源と変遷を述べ、秦・漢・唐・宋の諸家の文体を論じ、時流（当時流行の）文章上の通弊を指摘して準拠すべき模範を教示したもので、有造館学生の文章上依るべき教科書であった」と指摘する。

天保13年（1842）後ほどなく成立した東条耕（号は琴台､1795～1878）著『諸藩蔵版書目筆記』巻3、津藩造士館（有造館？）の条には、「拙堂文話、八巻四本斎藤謙撰　続拙堂文話、八巻四本同上」等の7書をあげて、「以上の七種は造士館（有造館？）にて出費して出来すれども、さして侯家の蔵版とは称しがたし。侯家の蔵版　温公（資治）通鑑のみなりと、その儒官塩田又之丞　余に語れり」とある。塩田又之丞は、津藩儒の塩田随斎（名は重華、又之丞は通称、随斎は号、1798～1845）を指す。江戸の藩邸で生まれ、津城にあること28年。天保3年、ようやく特別の恩情で津藩江戸藩邸の講師となり、母への孝養を遂げた人である。

塩田随斎は、侯家（藩主）自身の蔵版ではなく、藩校の出費で刊行された、藩の家臣の出版物（藩儒版･藩校版・個人蔵版）である、と言いたいのであろう。実際の出版作業（彫板・印刷・造本）と販売は、多く藩と関わりのある書肆に行わせた。この意味で『拙堂文話』第1冊の見返中の「古香書屋版」､『続文話』第1冊の見返中の「製本所　不自欺斎」の語が気にかかる。書肆が藩版・藩校版に関わる場合、多く自らを製本所・製本販売所・製本取次所などと称したらしい。ただし『諸家蔵板目録』（関研次所蔵本、『日本書目大成』第4巻所収）「津　造士館（マ）（マ）　藤堂和泉守」の条には、『拙堂文話』･『続文話』の名は見えない。現存する正続『文話』には、『資治通鑑』や『月瀬記勝』のごとき「（津藩）有造館蔵版」の語も見えないようである。

津市教育会編『津市文教史要』にいう、「正謙が文名を博するに与つて最も力のあつたものは、天保元年（＝文政13年〔1830〕）に上梓した拙堂文話で、古来詩話の著はあるも、文話は未だないので、正謙は先鞭を着けて之を編んだのである。正謙時に齢三十四歳、本書が一たび世に出てから、嘖々として学者間の話題に上り、為に伊勢に拙堂あるを知るに至つたと思はれる。月瀬記勝も文人の好評を博した書であるが、その刊行は文名が既に轟いた安政時代（嘉永4年〔1851〕の誤り）のことである」と。

以下、正続『文話』の序文を利用して、刊行の経緯に言及したい。古賀煜（侗庵）の「拙堂文話序」（文政13年〔1830〕）は、本格的な文話の出現に対する驚嘆を表白する。

予因りて文話一篇を著さんと欲す。客歳（去年）津の斎藤有終、賁然として是れ過ぎり、袖より一書を出だして予に示せり。之を繙けば則ち拙堂文話なり。予は圜視して駭くこと甚だし。徐ろにして熟味すれば、其の言う所は鑿鑿として綮窾（けいかん）に中らざる莫し。今茲（文政13年）の秋、復た新刊本を以て是れ示す。展閲すれば則ち続続と増補し、殆ど旧に三倍せり。且つ識は益すます宏くして論は益すます確かなり。予は生平論を持し、独り得たりと自負する者、皆な已に我に先んじて吐露す。其の幽を闡き蘊を抉るの見に至りては、則ち悉く予の慮表に出でて、予をして瞠若の嘆有らしむ。是に於いてか文話を著さんと欲するの蓄念は、挙げて之を氷消・灰冷に附せり。

他方、拙堂の自序（文政13年〔1830〕）には、文話執筆の意図と刊行の経緯を詳しく記している。いま全文を訓読する。彼は当時34歳、津藩藩校・有造館の講師で、藩主の侍読を兼ねていた。

詩の話有ること尚し。四六と詩余とは亦た皆な話有り。何ぞ独り文を遺す。文にして話無ければ、豈に缺典に非ざらんや。余は夙に以て遺憾と為す。平生　書を読みて古えを論ず。其の他の談話に及ん

で、文章に関する有る者は、即ち之を筆す。久しうして筐に盈つ。乃ち釐めて八巻と為し、文話を以て之に命ず。戊子（文政11年〔1828〕）の秋、携えて東行し、侗庵先生（古賀煜、拙堂より9歳年長）に示す。先生は蓋し亦た此れに意有り。為に一絶を題して曰く、「文を論じて意有り　輯めて編を成すに、早に斯の人に先ず鞭を著けらる。慧眼　真に秦鏡の照らすがごとく、作家の心胆　目前に懸かる」と。既に還り、西して頼山陽（拙堂より17歳年長）に示す。山陽は又た妄りに之を賛して曰く、「此の書は創闢たり。序無かるべからず」と。為に序して之を還す。皆な請わずして獲る所なり。石川督学（名は之褧、号は竹厓、文政7年〔1824〕31歳で、有造館の督学〔校長〕に就任し、没年〔1844〕まで在任。1794～1844、拙堂より3歳年長）は、固より将伯の助け有る者なり。乃ち（侗庵の）詩と（山陽の）序とを以て之に示す。督学曰く、「既已に此くのごとければ、子は其れ徒らに止むべからず」と。是に於いて余が意始めて動く。乃ち校して梓に上す。昔　王弇州（明代の文学者・王世貞、1526～1590）は壮歳に『芸苑卮言』を著す。物徂徠（江戸中期の儒学者・荻生徂徠、1666～1728）は中年に『蘐園随筆』を著す。後皆な之を悔ゆ。余の才は既に弇州に及ばず、年は又た未だ徂徠に及ばず。此の書の出づる、他日能く悔ゆること無からんや。既に此くのごときを知らば、則ち宜しく人に示さざるべし。之を蠹食に供するに非ざれば、則ち之を炎火に畀う。固より其の所なり。然れども先輩（侗庵・山陽）の奬揚の言と将伯（石川督学）の力と、又た将に従いて泯びんとすれば、則ち亦た惜しむべし。是れ此の挙の未だ悔いざるに及ぶ所以なり。其れ果たして文壇の缺を補うや否やは、余の知る所に非ざるなり。

続編（『続文話』）に寄せた拙堂の「自序」（天保8年〔1837〕、39歳）によれば、拙堂は続編の刊行によって文人としての名声を獲得するのは不本意であり、今後は「文を話る」ことをやめたい気持ちを吐露する。自序の冒頭部にいう。

余は文話を著して数年、嗣いで得し所の者、復た籠底に積み、褒然として冊を成す。適ま書肆の続刻を請う者有り。遂に出だして之に付す。是に於いて海内の士、交りを締び好みを通ずる者は、皆な余を言語文字の間に求む。余が意、焉を屑しとせず。以為らく、丈夫七尺の身は、自から樹立する所有り。言語文字は特だ其の緒余（余力・余技）なるのみと。此れを以て名を獲るは、豈に平生の志ならんや。且つ古人は四十にして仕う（『礼記』内則篇）。蓋し以為らく、徳立ち道明らかなるの時なりと。今余が年は殆ど之（40歳）に及ぶ。

この「自序」を読んだ篠崎小竹（名は弼、拙堂より16歳年長）の題記（拙堂「自序」末尾の余白〔半丁〕を利用して小字で刻される）にいう。

今　其の序を読むに、自ら文人と為るを悔ゆるがごとくして、復た文を話るを欲せざれば、則ち予惑えり。拙堂の文を話るは、古今を商榷して権変差わざるも、其の尤も推服する者は韓子（愈）なり。韓子は文を以て名を為すと雖も、身を君国に致し、政議・軍謀　当世に赫奕たりて、其の学識は能く往を継いで来を開く。宜なるかな、拙堂景仰し、其の文を編次して以て孔孟の籍に附せんと欲するに至る。予謂えらく、拙堂　文を話るは、即ち道を話るなりと。学ぶ者は文に因りて道を進み、韓子のごときを得ば、亦た恨み無かるべし。今乃ち平生話る所を舎てて、別に樹立する所有らんと欲す。然らば則ち嚮者話る所は、皆な心猿なるか、意馬なるか、抑も劓黥の醜むべきか。拙堂の意は、然るに非ざるなり。文　余り有りて、行い足らざるは、君子の恥づる所、技遜れば辞は乃ち爾り。亦た一話を成すのみ。然らずんば則ち其れ徳を立て道を明らかにして、以て聖賢（孔子・孟子）の「惑わず」・「心を動かさず」なる者を希わんと欲するは、豈に斯文を外して別に功を用いる所有らんや。朱子は云わずや、道の寄する所は言語文字の間を越えず（「中庸章句序」）と。学ぶ者は誠に能く言語を考えて以て其の徳を立て、文字を徴かにして以て其の道を明らかにすれば、則ち文を以て命と為すは可し。終身　文を話るは可し。拙堂以為らく、何如と。

松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその摂取―』は、文中の「予謂えらく、拙堂　文を話るは、即ち道を話るなりと」（予謂拙堂話文即話道也）の一語に対して、「拙堂文話の真髄を喝破したばかり

でなく、拙堂の詩文論は道徳的詩文観であることを道破したものである」と評している（斎藤拙堂の章）。
なお、撰者・斎藤拙堂の事跡については、前条（②　斎藤拙堂撰『拙堂文集』６巻）の解題を参照。

〈参考文献〉

・笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、1962 年）
・松下忠『江戸時代の詩風詩論―明・清の詩論とその摂取―』（明治書院、1969 年）
・長澤規矩也・阿部隆一編『日本書目大成』第４巻（汲古書院、1979 年）
・東条耕著『諸藩蔵版書目筆記』（『解題叢書』国書刊行会、1916 年所収）
・津市教育会編『津市文教史要』（津市教育会、1938 年）
・近藤春雄『日本漢文学大事典』（明治書院、1985 年）
・高橋明彦「何を藩版として認めるのか―蔵版の意味するもの」（鈴木俊幸編『書籍の宇宙―広がりと体系』平凡社、2015 年所収）

④　重野成斎撰『成斎文初集』３巻・『成斎文二集』３巻

〈外題〉成斎文初集　一（～三）　成斎文二集　一（～三）（刷題簽）

〈内題〉成斎文初集巻一（～巻三）　成斎文二集巻一（～巻三）

〈その他題〉『初集』―　序題…成斎文集　　目次題･柱題…成斎文初集　尾題…成斎文初集巻一（～巻三）、『二集』―　目次題・柱題…成斎文二集　尾題…成斎文二集巻一（～巻三）

〈巻数〉『初集』…３巻３冊　『二集』…３巻３冊

〈著編者〉『初集』…幕末･明治の重野成斎（名は安繹、字は士徳）自撰（手定）『二集』…重野成斎自撰、嗣子の重野紹一郎（述夫）続成、小牧昌業・河田羆（たけし）校訂

〈著編注記〉『初集』･『二集』とも、各巻内題２行目に「重野安繹士悳著」（悳は徳の異体字）とあるが、『二集』の巻頭を飾る小牧昌業撰「序」に、「（先生〔成斎〕は）後に又た二集を校定するも、未だ半ばならざるに館を捐つ。哲嗣の述夫（＝重野紹一郎）、続（つ）いで之を成し、巻数は前（『初集』）と同じ」という。『二集』の重野紹一郎撰「例言」にもいう、「是の編は、先子（亡父の成斎）疾いに力めて選定・校閲し、体裁は率ね『初集』に同じ。但だ門類の排次の　前例（『初集』）と異なる者は、亦た先子の更訂に係る。刊刻半ば成りて、遽かに背かる。其の甚だ関念する所なるを以て、故に小牧（昌業）・河田（羆。静嘉堂文庫長）の二子に請いて校讐せしめ、急いで工を督して功を竣（お）う」と。重野紹一郎は「嘗て仏国に学ぶこと十三年、現に外国語学校教授たり」（西村時彦編「成斎先生行状資料」）。

〈残欠状況〉完本　　〈保存状況〉『初集』は良好。ただ若干、第１冊の表紙は色落ちし、続く二冊の表紙も少し汚損する。『二集』はほぼ良好であるが、第１冊の表紙はやや汚損し、続く２冊は綴じ糸がほつれ切れている。『初集』・『二集』ともに書中の文面は綺麗である。　　〈体裁〉袋綴　　〈丁数〉『初集』…①65 丁（序・目次・巻１、巻１の第 51 丁は重複するが、重複は丁数に入れていない）、②64 丁（巻２）、③64 丁（巻３・跋）『二集』…①63 丁（序・例言・目次・巻１）、②61 丁（巻２）、③57 丁（巻３）

〈写刊年時〉『初集』は明治 31 年（1898）刊、『二集』は明治 44 年（1911）刊

〈本文用字〉漢字。漢文には断句の点（小圏）のみを付す。　〈法量〉縦 26･１糎×横 17･０糎　　〈匡郭〉左右双辺、縦 17・６糎×横 12・０糎　　〈一面行数〉９行 20 字　　〈版心〉白口、単黒魚尾　　〈界線〉アリ　　〈表紙〉『初集』は香色・無地、『二集』は金茶色・無地

〈刊記〉『初集』（第３冊の裏見返）

明治三十一年二月廿五日　印刷
明治三十一年二月廿八日　発行
版権／所有　編纂者　　重野安繹
東京市神田区駿河台袋町壱番地
発行兼／印刷者　合資／会社　富山房

東京市神田区裏神保町九番地
合資会社富山房社長
代表者　　坂本嘉治馬
東京市神田区裏神保町九番地

『二集』（第３冊の裏見返）
明治四十四年十一月廿五日　印刷
明治四十四年十一月廿八日　発行
版権／所有　編纂者　　重野紹一郎
東京市牛込区市谷仲之町拾九番地
発行兼／印刷者　合資／会社　富山房
東京市神田区裏神保町九番地
合資会社富山房社長
代表者　　坂本嘉治馬
東京市神田区裏神保町九番地

ちなみに、『初集』第１冊の見返には「明治丁酉歳／曙戒軒蔵版」（明治丁酉の歳は明治 30 年）とあるが、『初集』の刊行は翌年の明治 31 年戊戌（刊記）である。このことは、小牧昌業撰「序」にも「成斎文初集三巻は、先生（成斎）手ずから定め、戊戌（明治 31 年）の春に刊行す」という。曙戒軒は居所にちなむ成斎の別号（『管子』形勢篇から採る）。『二集』第１冊の見返には「明治辛亥歳／曙戒軒蔵版」（明治辛亥の歳は明治 44 年）とある。「曙戒軒蔵版」の語は、『初集』・『二集』ともに、版心下部にも見える。

『初集』第３冊巻３の巻末に「月邨多田賢意　作字／木邨嘉平　鐫刻」、『二集』第３冊巻３の巻末（欄外）に「伊東寅吉刻」とある。木邨（木村）嘉平は、江戸の天明年間から明治時代まで５代続いた、有名な字彫り版木師の名。『初集』を担当した木邨嘉平は、明治 15（＝光緒８年〔1882〕）～ 17 年に刊行された清国駐日公使・黎庶昌編刊『古逸叢書』（黎庶昌が日本に駐在中、部下の楊守敬の助けを得て、中国で亡び日本に伝存する佚存書・版本 26 種を選刊）の覆刻・摹刻を担当して、精妙さを嘆賞された４代木村嘉平（３代木村嘉平〔房義、1823 ～ 1886〕の嗣子・庄太郎〔昌義〕、1855 ～ 1883、29 歳没）ではなく、その弟、５代木村嘉平（赤次郎、1873 ～ 1928）である。『二集』を担当した刻工・伊東寅吉は３代木村嘉平の門人。「其の筆意彫りを忠実に墨守し、書画類に之を応用し、識者に其の熱誠と、細緻にして微塵も忽にせざる良心的技術とを認められた者」（木村嘉次『木村嘉平とその刻本』21 頁）という。『初集』は「其の体裁　一に『海南遺稿』（明治 21 年に没した藤野海南の文集）に同じく、書と刻と並に精なるは、明治板本の最なるべし」（西村時彦編「成斎先生行状資料」）と評される。　〈蔵書印〉『二集』のみ「韶澤氏／図書印」（朱印）

〈備考〉『初集』第１冊は、巻頭に遵義（中国貴州省）の黎庶昌（字は蕓斎、1837 ～ 1897。２度、清国駐日公使〔中国駐日本国大臣〕となった清末の外交官）撰「成斎文集叙」（光緒 17 年〔＝明治 24 年、1891 年〕作）を置く。続いて「成斎文初集目次」、本文（『初集』巻１）となる。『初集』第３冊巻３の巻末には、中村正直（号は敬宇、1832 ～ 1891。教育者・啓蒙思想家、成斎とは昌平黌で知り合う）撰「書重野士徳文稿後」（重野士徳〔成斎の字〕の文稿の後に書す）を収める。この文章は「安政丁巳（安政４年〔1857〕）の秋」に作られた。安政４年の１月は、江戸にいた薩摩鹿児島藩士・成斎が罪を得て、鹿児島の南方洋上にある大島に流された年である。１月 14 日、「先生（成斎）江戸を発するに臨み、親友中村敬宇氏を丹波谷に訪ふて袂別し、門人中西重三を托せり」（西村時彦編「成斎先生行状資料」）という。同年の秋、南方流罪の成斎を懐かしんで作った、この文章の後に記す成斎の識語（明治 30 年８月）には、自分より５歳年少の中村正直（敬宇）は、没して７年になる。「拙文（『初集』）を刻するに及んで、一言を乞う能わず。乃ち此の篇を以て題跋に代う」という。

『二集』第１冊は、巻頭に小牧昌業（字は偉卿、号は桜泉、1843 ～ 1922）撰「序」（明治 44 年〔1911〕10 月）を置く。小牧昌業（桜泉）は「少より老に至るまで交誼尤密なりし同郷」（西村時彦編「成斎先生

行状資料」）の人。この後、成斎の嗣子・重野紹（紹一郎の修名）撰「例言」（明治44年辛亥10月）・「成斎文二集目次」と続いて、本文（『二集』巻1）となる。『二集』には跋文はない。

〈解　題〉

『成斎文初集』3巻3冊、『成斎文二集』3巻3冊は、幕末・明治の有名な漢学者・史学者、重野成斎（名は安繹（やすつぐ）、1827～1910）の文章181篇（『初集』84篇・『二集』97篇）を収めた漢文集である。

成斎自編の『成斎文初集』…　巻1（第1冊）は序28篇（「明治詩文叙」「国史纂要序」「沖縄志後序」「操觚字訣序」「送清国公使黎蕤斎序」他）、巻2（第2冊）は記・題跋・論・賛・問対など36篇（「霞関臨幸記」「桜雲台讌集記」「錦江秋汎記」「鏡喩」「題狩野探幽耕作図」「読荘子」「武侯図賛」「梶原景時論」他）、巻3（第3冊）は啓疏・碑文・墓表・墓誌銘など20篇（「綜核名実」「進編年書啓」「論修史事宜疏」「塩谷宕陰先生墓表」「藤野伯迪墓碑銘」他）、あわせて84篇の文を収める。

『成斎文二集』…　巻1（第1冊）は碑文・序20篇（「故参議兼内務卿正三位勲一等贈右大臣従一位大久保（利通）公神道碑」「故三菱社長岩崎君（弥太郎）碑」「河村瑞賢碑」「国史眼序」「校訂史記評林序」他）、巻2（第2冊）は序・引37篇（「藍園詩鈔序」「沖堂文集序」「西稗雑纂序」「塩渓紀勝序」「兼六園志序」「葛飾北斎伝序」「昌文新編序」「囲棋新報引」他）、巻3（第3冊）は記・説・題跋・賛・銘・祭文など40篇（「何陋台記」「世徳堂記」「成趣園記」「慈眼寺観楓記」「廃剣説」「題山陽真蹟西游詩後」「題文衡山書後」「桂庵禅師画像賛」他）、あわせて97篇の文を収める。

ちなみに『成斎先生遺稿』に収める、成斎の嗣子・重野紹一郎撰「凡例」によれば、『二集』には3篇の誤収があった。巻1の「貞婦横山氏」は植松有常の代作、巻2の「精養軒燕集序」と巻3の「跋豊太閤与小出秀政手柬」は日下勺水（名は寛、字は子栗、成斎などに師事、1852～1926）の代作とする。

『二集』の「例言」にいう、「『初集』は毎篇必ず同人の評語を撮録す。是の編（『二集』）、前に既に備わる者は則ち之を載す。其の未だ備わらざる者は則ち之を闕く」と。この編集方式の異同は、成斎の急逝と関連しよう。「『二集』は上木中にして、一篇　刻成る毎に先生病中に校合して、病革まるまで、廃せざりしが、其の成るを見ずして逝けり」（明治44年1月に成る西村時彦編「成斎先生行状資料」）と。『初集』に収める文章には、少なくとも一人以上、幕末・明治期の著名な交友（中国人を含む）の評語が作品の後ろに付される。たとえば「明治詩文叙」には、中村敬宇・藤野海南、「沖縄志後序」には中村敬宇・竹添井井、「送清国公使黎蕤斎序」には木原老谷、「霞関臨幸記」には中村敬宇・川田甕江・岡鹿門、「錦江秋汎記」には木原老谷・高雲外、「進編年書啓」には今藤悔堂・小牧桜泉、「塩谷宕陰先生墓表」には島田篁村・小牧桜泉・星野豊城、「藤野伯迪墓碑銘」には岡鹿門・三浦雷堂のごとくである（このうち、敬宇・海南・老谷・雲外・鹿門・雷堂らは、昌平黌における同学。なかでも敬宇・海南は親密な旧友であった）。『二集』では評語を欠く文章が多いが、「大久保公神道碑」（略題）には長松秋琴・中村敬宇・島田篁村・小牧桜泉、「国史眼序」には中村敬宇、「藍園詩鈔序」には中村敬宇・藤野海南、「沖堂文集序」には片山沖堂・中村敬宇・方濬益・姚志梁、「塩渓紀勝序」には黎蕤斎、「囲棋新報引」には岡鹿門、「何陋台記」「世徳堂記」には小牧桜泉・島田篁村、「廃剣説」には藤野海南の評語が見られる。

評語の掲載は『成斎文』編集の特色となる。西村時彦編「成斎先生行状資料」にいう、「推して一代の文宗と称せらるるも、其の平生　文を作るや、必ず稿を改むること再三再四、而して後ち交友の批正を求め、或は後進に下示し、一篇成る毎に、他人の批評を得ざれば、則ち敢て世に出さず、痛く彼の師心自ら用ひ、正に就くを知らざるの非を悪めり。是を以て烹錬精熟して、瑕疵の撃つ可き靡し」と。評語の掲載は、こうした成斎の創作姿勢も関連しよう。

『初集』の巻頭を飾る清国駐日公使・黎庶昌の「成斎文集の叙」にいう、「重野君成斎は日東人士の魁傑たり。余と交わること且に十年にならんとす。是れより先、光緒七年（＝明治14年〔1881〕）余は使いを日本に奉じて、随員の楊君惺吾（楊守敬〔1839～1915〕、惺吾は字、清末・民国初期の学者・書家。明治13年、初代の駐日公使・何如璋に招聘されて来日し、二代駐日公使・黎庶昌の知遇も得て、東京に4年間滞在し、中国の古書を収集した）を以て媒と為し、因りて交わりを成斎諸子に内るるを得たり。是の時

に方りて、成斎は史局に在りて編修官たり。巌谷古梅（名は修、号は一六・古梅）・藤野伯迪（名は正啓、号は海南、伯迪は字）・川田甕江（名は剛）の輩と討論・編摩（研究）し、芸（文章）を譚（かた）ること甚だ洽し。又た三条公爵実美を得たり。懿文・碩徳を以て之が長と為り、益（ます）ます偉抱（遠大な抱負）を発攄するを得たり。漢学は猶お未だ尽くは廃せざるなり。…　余は先後　節を駐むること（清国駐日公使としての在任期間）六年、燕会（宴会）に遇うごとに、成斎は率ね文有りて投ぜらる。其の文を読めば、光明・俊爽にして、其の意の達（伝達）せんと欲する所と為る。然れども未だ其の全を睹ざるなり。辛卯（光緒17年〔＝明治24年、1891〕）二月、余　任満ちて国に帰る。行くに瀬（せま）りて、成斎は手ずから一編の『曙戒軒文稿』と曰うを出だして、之が叙を為るを属（たの）む。因りて此の冊を挟みて都に入る。南北に舟車もて転輾たること半歳、始めて克く践諾（約束を履行）せり」云々と。

重野成斎は、川田甕江（名1830～1896）とともに明治の二大文章家と称された（明治時代の文章の四大家といえば通常、成斎・甕江の２人に中村敬宇・三島中洲を加える）。藤野海南（名は正啓、1826～1888、昌平黌以来の知友で文章家）は、成斎の文章を評していう（『初集』巻１、「明治詩文叙」に付す評語）。

> 成斎　初年東坡（北宋の蘇軾）を喜び、才華英発、一瀉千里なり。中年以後、廬陵（北宋の欧陽修）を矩獲（くわく）し（手本とし）、意志深遠、紆余曲折す。革新（明治維新）の後は則ち文柄を以て自ら任じ、務めて浮薄軽佻の時弊を救う。其の作は大率荘重典雅、経史に根拠し、和漢を雑引し、学識の富、筆墨の間に見る。余れ成斎の文を観ること尤も多し。其の文は今に至りて三変す。

晩年には、桐城派（清代古文の一派）の曽国藩の幕僚になって古文を学んだ清国公使・黎庶昌の影響を受けて、専ら桐城派の文章を手本にしたという。

また小牧昌業撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」にいう。

> 文章は（安井）息軒・（塩谷）宕陰を継ぎ、蔚として昭代（明治期）の一大宗と為る。初年は東坡（蘇軾）を喜び、才華英発。中年以後は典雅富贍、俯仰雍容たりて、頗る廬陵（欧陽修）と近し。晩年は声誉益（ます）ます隆んにして、一時の碑版（碑誌）・叙記（序記）の作は、多く其の手に出で、四方に伝誦す。其の勅を奉じて撰する所の「大久保公神道碑」は、尤も烜赫（けんかく）たる者なり。

明治時代、文章家の社盟を結ぶ「文会」には、藤野海南らの旧雨社（明治５年創立）、川田甕江らの廻瀾社（明治７年創立）、重野成斎らの麗沢（りたく）社（明治12年〔1879〕創立）、石幡東嶽らの以文会（明治35年創立）などがあって、それぞれ明治文運の維持に尽力した。成斎を盟主とする麗沢社の活動に関して、西村時彦編「成斎先生行状資料」にいう、「（藤野）海南・（岡）鹿門及び小山春山・小牧桜泉・星野豊城・蒲生褧亭・村山拙斎の諸儒を始め、後進子弟も亦会し、毎月一会、初六を以て期と為し、席上　文を課せり。此の会　初めは麹町の米華堂、後には星ヶ丘茶寮などに開きしが、清国公使の何如璋時代、黎庶昌時代には、清国の文士も来会して、翰を飛ばし文を論じ、儒雅風流　一時の盛を極めたり。蓋し古文辞を修むる者、益を此の会に獲たるや莫大なり。而して先生も亦必課題の文を作りて、諸儒と互に相評隲し、恂々として足らざるが如し」と。

撰者の重野成斎、名は安繹、字は士徳、通称は厚之丞、龍泉・未斎・成斎などと号した。薩摩国鹿児島に生まれ、藩校・造士館に入って学ぶ。嘉永１年（1848）22歳のとき、江戸に出て昌平黌に入り、古賀茶渓・佐藤一斎・安積艮斎らに学び、「羽倉簡堂・安井息軒・塩谷宕陰の諸老儒は、皆な其の才を愛し、引きて文社に参ぜしむ」（小牧昌業「重野先生碑銘」〔略題〕）という。在学７年の安政１年（1854）、藩主（島津斉彬）の命で昌平黌を退き、造士館訓導師になる（江戸在勤）。安政４年（1857）31歳のとき、罪を得て帰国、大島に流罪された。在島５年強の文久３年（1863）37歳の春、赦されて帰り、薩英戦争の講和談判委員となって横浜に赴き、和議を成立させた。元治１年（1864）造士館の助教になると、島津久光から修史事業を命じられ、造士館内に史局を開いて、『大日本史』を編年体に書き改めた『皇朝世鑑』の編纂にあたる。明治２年（1869）43歳のとき、治政所書記となって藩政にあたったが、版籍奉還で廃官。久光の内命を受け、大阪で藩祖事跡の取調べに従事し、その傍ら私塾を開く。この時に、三菱財閥を成す岩崎弥太郎・弥之助兄弟が入門した。明治４年（1871）45歳のとき、上京して文部省に出仕し、翌

年太政官に転じ、さらに左院書記官となって地誌の編集に従う。明治８年（1875）、太政官修史局の副長となる（史官の開始）。明治10年、修史館の一等編修官、明治14年、編修副長官となって修史館の全権を掌握し、翌年から漢文体の編年通史『大日本編年史』（南北朝時代から起筆）の編纂を始めた。明治21年（1888）62歳のとき、修史事業が帝国大学に移管されると、史料編纂所の前身である臨時編年史編纂掛の委員長となり、帝国大学文科大学教授を兼任して、設置された国史科の学生を指導した（同年、文学博士の学位を受ける。文科大学教授の辞任は明治24年３月）。歴史学者としては、史料の蒐集に努めて事実を考証し、近代史学の基礎を築いた。考証を積み重ねて事実を探究した結果、「抹殺博士」の異名を取る。明治31年、72歳のとき、『成斎文初集』３巻３冊を刊行。９月には再び文科大学教授となり、漢学・支那語学第１講座を担当した（明治34年７月辞任）。明治43年（1910）12月６日、東京市ヶ谷の自宅で死去、享年84歳。『成斎文二集』３巻３冊は、翌明治44年11月の刊行である。

〈参考文献〉

・西村時彦（号は天囚、成斎の門下生）編「成斎先生行状資料」（『重野博士史学論文集』上巻〔雄山閣、1938年〕所収）
・小牧昌業撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」（『重野博士史学論文集』上巻・『成斎先生遺稿』所収）
・神田喜一郎編『明治漢詩文集』（明治文学全集62、筑摩書房、1983年）
・三浦叶「明治の漢文」（神田喜一郎編『明治漢詩文集』所収）
・町田三郎「重野成斎の人と学問」（同『明治の漢学者たち』研文出版、1998年所収）
・木村嘉次『（字彫り版木師）木村嘉平とその刻本』（青裳堂書店、日本書誌学大系13、1980年）。木村嘉次は５代木村嘉平（赤次郎）の長男。

⑤　重野成斎撰『成斎先生遺稿』15巻

〈外題〉成斎先生遺稿　巻一（～巻十四、十五）（刷題簽）
〈内題〉成斎先生遺稿巻一（～巻十五）
〈その他題〉扉題…成斎先生遺稾　　凡例題・目次題…成斎先生遺稿　　柱題…成斎先生遺稿、成斎先生遺稿巻一（～巻十五）　　尾題…成斎先生遺稿巻一終（～巻十五大尾）
〈巻数〉15巻８冊
〈著編者〉重野成斎（名は安繹、字は士徳）撰、嗣子の重野紹一郎編、館森鴻校訂。
〈著作注記〉各巻内題二行目に、「重野安繹士徳甫著」とある。館森鴻（たてもり）（号袖海）の「序」の冒頭にいう、「成斎先生　世に就いて、已に十余年、遺稿未だ刊せず。頃者（このごろ）　鴻の校訂は既に畢る、凡て十有五巻、哲嗣の述夫（重野紹一郎）爰に以て印行す」と。
〈残欠状況〉完本　　〈保存状況〉良好。ただ最初の表紙や最後の裏表紙などが、少し汚損する。書中の文面は綺麗である。　　〈体裁〉袋綴　　〈丁数〉①66丁（序・凡例・目次・巻１）、②60丁（巻２～３）、③66丁（巻４～５）、④68丁（巻６～７）、⑤63丁（巻８～９）、⑥38丁（巻10～11）、⑦73丁（序・巻12～13）、⑧71丁（巻14～巻15）
〈写刊年時〉大正15年（1926）刊　　〈本文用字〉漢字。漢文には断句の点（小圏）のみを付す。　　〈法量〉縦26・３糎×横17・１糎　　〈匡郭〉左右双辺、縦18・１糎×横12・３糎　　〈一面行数〉10行21字　　〈版心〉白口、単黒魚尾　　〈界線〉アリ　　〈表紙〉香色・無地
〈刊記〉第８冊の裏見返

大正十五年六月十一日印刷
大正十五年六月十五日発行
著作者　　故重　野　安　繹
東京市赤阪区青山高樹町十四番地
発行者　　重　野　紹　一　郎

東京市日本橋区亀島町一丁目四十二番地
印刷人　　円　谷　三　之　助
東京市日本橋区亀島町一丁目四十二番地
印刷所　　円　谷　印　刷　所
東京市神田区今川小路二丁目十七番地
発兌元　　松　雲　堂　書　店

各巻の版心下部には「曙戒軒蔵版」とある。曙戒軒は居所にちなむ重野成斎の別号。また第1冊の見返には「大正丙寅／四月開彫」(篆書体)とある。大正丙寅は大正15年(1926)〔同年12月、昭和1年となる〕

〈備考〉本書は巻頭に「成斎重野先生肖像」1枚を掲げた後、大正15年3月の、公爵・島津忠重（鹿児島島津氏30代当主、1886～1968）撰「序」と同年同月の、受業生・館森鴻（字は子漸、号は袖海、1862～1942、岡鹿門・重野成斎の門下生）撰「序」、および小牧昌業撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」を収める。そして成斎の嗣子･重野紹（紹一郎の修名）撰「成斎先生遺稿／凡例」、「成斎先生遺稿目次」と続いた後、本文（『遺稿』巻1）となる。

なお『成斎先生遺稿』15巻8冊のうち、文章は巻1～巻11の11巻6冊、詩は巻12～巻15の4巻2冊である。詩（古今体詩）を収める第7冊巻12の巻頭には、安政6年（1859）の松林漸（号は飯山、昌平黌で学ぶ。大村藩儒、1839～1867）撰「序」が置かれる。この「序」は本来、成斎が安政4年（1857）31歳のとき、罪を得て南島（鹿児島県）に流罪になる前、江戸に滞在中に作った詩稿に対する序文であったが、『遺稿』の校訂者・館森鴻が独自の判断によって詩（巻12～巻15）の序に据えたのである。この後に見える館森の識語にいう、「松林飯山は成斎先生と相い善し。此の序は実に知己の言。因りて之を先生の詩稿の首に置く。序中に称する所の稿本は、今　何処に在るかを知らず。若し他日　之を得ば、当に即ち更に排印に付すべし」と。本書には跋文はない。

〈解　題〉

『成斎先生遺稿』15巻8冊は、幕末・明治の有名な漢学者・史学者、重野成斎（名は安繹、1827～1910）の文290篇と詩733首を収めた漢詩文集の名。『成斎文初集』『成斎文二集』の刊本（整版）とは異なって、本書は排印本（活字本）である。成斎の嗣子･重野紹一郎の「凡例」によれば、男爵･岩崎小弥太（三菱財閥第4代総帥〔第2代総帥・岩崎弥之助の長男〕）の援助を受けて出版した。「先子（亡父の成斎）の遺稿は、西村子俊（名は時彦、号は天囚、子俊は字、成斎の門下生）に属(たの)みて校訂せしむ。子俊は遽かに没す（大正13年〔1924〕7月30日没、享年60歳）。乃ち館森子漸（名は鴻、子漸は字、号は袖海）に属みて校訂せしむ。子漸は文二百九十篇・詩七百三十三首を審定す。都て十有五巻、八冊と為し、爰に排印に付す」（「凡例」）と。巻5に収める「贈正四位蒲生秀実〔字君平〕碑」は、日下勺水（名は寛、字は子栗、成斎などに師事）の代作であるが、成斎の添削した原稿が現存する。碑文はすでに日下勺水撰『鹿友荘（文）集』に収録されていたが、「両つながら存するも、亦た可ならずや」との勺水の語によって収録した。

『成斎先生遺稿』は『成斎文初集』『成斎文二集』とは異なって、詩を収録する。この点に関して、「先子の詩稿は曽て整頓せず、大半亡逸す。今　捜し覓むるに由無し。乃ち筐中に遺る所の者を取りて之を収む」（「凡例」）という。『成斎文二集』に収める重野紹一郎の「例言」にいう、「先子の詩文稿の、家に蔵する者は尚お多し。他日続輯して、以て全集を成すを期す」の願いの実現が、この『成斎先生遺稿』15巻8冊なのである。

本書の巻頭を飾る島津忠重の「序」（大正15年〔1926〕）にいう。

> 成斎の文学は、卓然として誠に一世の泰斗なり。曩者(さきに)其の文一二集を刻す。頃ろ嗣子（重野紹一郎）は遺稿を刻して、吾に序を請う。…　明治維新となり、（成斎は）諸職を歴(ようれき)し、朝位に班(つら)なり、文柄を操りて、其の為る所の文は、世已に定論有り。吾復た何をか言わんや。嘗て聞く､「羽倉簡堂（名は用九、幕臣、1790～1862）謂えらく、成斎の道の消長は、文運の盛衰に関わる」と。誠なるかな。文運に功有ることは、已に論じ已れり。若し夫れ才猷（才能・謀略）練達し、折衝して侮りを禦ぎ、

国威を墜とさざれども、持論は開国に在ること、則ち知る者は蓋し鮮異ならん。成斎の文を読む者は、其れ亦た此れを知らん。

「嘗て先生（成斎）に従って游び」し受業生・館森鴻（号袖海）の「序」（大正15年）にいう、

先生は近代儒林の冠なり。…　嘗て諸生を諭して曰く、「経と史とは、離すべからざるなり。河汾の王氏（隋の王通）は、詩・書・春秋を以て三史と為す。其の義は深し。夫れ経史の学は、宜しく考証に拠りて、以て大義を明らかにす。若し故実を鄙棄して、徒らに空遠を騖せれば、功は豈に致し易からんや。且つ豪芒〔毫芒〈微細〉の訛〕を剖析して、千百言を費やすは、抑も又た誤れり。近時の儒者は、多く国学に通ぜず。夫れ国学に通ぜざれば、則ち文物風尚の故に昧し。又た治乱の迹に明らかならず、茫乎として嚮かう所無し。故に万葉集・古事記伝等の書は、読まざるべからず」と。誠なるかな。此れ第だに自ら之を言うのみならず。而して先生の歴る所は、或いは国史を編修し、大学に教授し、復た台閣の糸綸（詔勅）を賛く。詩（大雅・烝民）に曰く、「古訓是れ式り、威儀是れ力む」、易（家人の卦）に曰く、「以て言に物（事実）有りて、行いに恒有り」と。其れ此れの謂いか。学を績むるの士は、先生の書を読めば、必ず道を学びて以て用を致すを知らん。文運の興こるは、企ちて竢つべし。然らば則ち先生の　世の宗仰と為る所以は、又た豈に徒だに文辞のみならんや。

重野紹一郎編、館森鴻校訂の『成斎先生遺稿』15巻8冊…　巻1（第1冊）は序・引36篇（「歴朝詔勅録序」「国史綜覧稿序」「枕流館宴集序」「薩藩士風沿革序」「羽嶽根本先生八十寿序」他）、巻2（第2冊）は記・説・銘・賛・贈など54篇（「陽和洞記」「後楽亭記」「楓喩」「雪達磨賛并引」「碁院名人本因坊丈和賛并引」他）、巻3（第2冊）は「史問」20篇、巻4（第3冊）は碑記・碑陰記・寿蔵碑など20篇（「明治頌徳碑記」「栗子隧道碑記」「贈右大臣大久保公哀悼碑陰記」「井上加納寿蔵碑」他）、巻5（第3冊）は碑文19篇（「佐古改葬陸海軍人碑」「碓氷嶺鉄道碑」「湯島神社一千年祭碑」「埼玉県令白根君碑」他）、巻6（第4冊）は碑文19篇（「甘藷先生碑」「布施翁善徳碑」「順庵木下先生遺愛碑」他）。

巻7（第4冊）は墓碑銘・墓碑・碑銘15篇（「参事院議官水本君墓碑銘」「会稽検査院副長安藤君墓碑銘」「茅根伯陽墓碑」「蒙古斬首塚碑銘」他）、巻8（第5冊）は神道碑・墓表・墓碣銘・墓碣15篇（「故越後侯上杉謙信神道碑」「河田迪斎先生墓表」「溟北先生墓碣銘」「大槻君墓碣」他）、巻9（第5冊）は墓誌銘・墓誌・墓銘・祭文20篇（「大蔵技監従四位勲三等得能君墓誌銘」「西村子所墓誌銘」「男爵岩崎君壙志」「祭蒲生褧亭文」他）、巻10（第6冊）は題跋31篇（「題仇英画滕王閣」「題江雲渭樹帖後」「題西郷南洲遺墨」「題宋徽宗白鷹画幅」他）、巻11（第6冊）は題跋41篇（「中川雪堂詩鈔題辞」「跋物徂来屏風書」「史徵墨宝第二編跋」「佐瀬得所書三体千字文跋」「書和名鈔箋注後」他。ちなみに本巻に収める「跋西郷南洲書」は巻10の「題南洲百里郵程詩後」の文とほぼ同じ）。

巻12（第7冊）は古今体詩114首（「発江戸」「早登筑波山、此日重陽」「松島」「古剣歌」「秋懐二十律」「次東坡韻」「癸亥秋、余因事抵長崎、遂僦洋舶、…」「丙寅歳旦」他）、巻13（第7冊）は古今体詩243首（「牡丹貍奴図」「過梅坡氏」「炭竈」「賦得曖曖遠人村」「樋脇温泉」「論史聯句二十六韻」〔中村敬宇との聯句〕「重遊熱海雑詩八首」「送大久保参議赴欧米諸国」「癸未重陽節、黎君蕤斎見招、黎君有詩、客皆属和、予亦成二律」「茶渓散策」「称名寺」他）、巻14（第8冊）は古今体詩211首（「与土浦諸子泛霞湖」「還暦宴席上作并序」「阿波徳島客舎次井上春縄韻」「金刀比羅贈逆旅主人虎屋」「那智山」「清国公使蕤斎黎氏招飲紅葉館、主人席上有詩、次韻以答、…」「送小牧偉卿昌業赴任寧楽」「哭吉田賢輔」「諏訪竹枝」「伊那」他）、巻15（第8冊）は古今体詩165首（「桐生客中吟」「游北越発都時作」「石狩」「江刺八勝并序」「悼中野逍遥」「明治戊戌歳旦試筆」「敬宇先生十三年祭、賦小詩述追悼之意」「西伯利車中作」「寿中洲三島博士八十」「森春濤十三年祭」他）。

猪口篤志『日本漢文学史』第6章　明治時代の漢文学、重野成斎の条にいう、「文章はじめは欧（陽修）・蘇（軾）を好み、晩に（清の）桐城（派の文章）を（正）宗とするに至った。しかしその作るところは初編（『成斎文初集』）が尤もよく、桐城の影響を受けた三編（『成斎先生遺稿』？）は見劣りがする。…　松平天行（名は康国、1863～1946）はいう、『先生の文、尤も体格を重んじ、荘重典雅、束帯して朝に立つが如し。

昔陸士衡（名は機）、人その才の多きを患ふ。先生は才多しと雖も、務めて其の華を斂め、隠約して之を出す。…　文品甚だ高し』」と。

三浦叶「明治の漢文」文人（文章の名家）、重野成斎の条にいう、「麗沢社を起こし、旧友知己を招いて文業を研究すること三十年に及び、明治文運の維持興隆に偉大な貢献をした。／壮年の頃は欧陽修・蘇軾を好み、晩年には専ら桐城派を手本とした。もっとも（清朝桐城派の）姚姫伝（名は鼐）を喜び、後進にもこれを勧めた。作品には名声が高かったことと長寿であったことから、序・記・碑がもっとも多い。／文章は荘重典雅で、才気を内に収めておのずから重厚の気分があった。ただしその気骨に乏しいのをその弱点とした者もある。…　／『成斎文集』は初集がもっともよく、二集はやや落ち、遺稿はますます劣るといわれているが、しかしその中にある「故越後侯上杉謙信神道碑」（巻八）はなかなかの傑作である」と。

成斎の文に対する論評は多く、すでに前条（④　重野成斎撰『成斎文初集』３巻・『成斎文二集』３巻）の解題中にも引用した。他方、成斎の詩に対する論評は、文章に較べて格段に少ない。西村時彦編「成斎先生行状資料」にいう、「先生少き時、亦蓋し専ら詩を学びしなり。厥（その）後ち力を文章に専にして一代の鉅匠たり。詩は緒余〔余力･余技〕のみ。然れども其詩は才に発して学に根し、勝を字句の末に争はざるも、力量の大、自ら大家の風度を見る。その詩稿は三燼余稿（維新前）柱下墨瀋（東上仕官後）等あり」と。小牧昌業（号は桜泉）撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」には、「詩は清警多致、殊に古風に長ず」と評する。『成斎先生遺稿』巻 12 ～巻 15 に収める詩 733 首は、「筐中に遺る」（「凡例」）ところの『三燼余稿』や『柱下墨瀋』等にもとづいたのであろうか。巻 12 の巻頭に収める、安政６年（1859）の松林漸（号は飯山）撰「序」（本来、罪を得て遠く南島〔鹿児島県〕に流罪された成斎の不遇を思いやった松林漸が、成斎が江戸で作った詩稿を入手し、それを流布させようとして作った序文）の一節にいう。

> 嗚呼、士徳（成斎の字）は、固に罪を以て廃され自ら棄てり。恃みて以て世に垂るる所の者は、独り文字有るのみ。乃ち人、或いは其の誣（無実の罪）を信じて、其の文字を并せて之を排斥するに至れば、則ち相い知ること吾が輩のごとき者は、安くんぞ愛重して、以て其の伝わるを謀らざるべけんや。此の集は、余　之を緒方某の所に得たり。詩は凡て若干首。其の江戸に在りし時の作に係る。今之を読むに、豪宕・沈渾にして、慨世の作、十に八九を居（し）めり。

撰者・重野成斎の事跡については、前条（④　重野成斎撰『成斎文初集』３巻・『成斎文二集』３巻）の解題を参照。

〈参考文献〉

・三浦叶「明治の漢文」（神田喜一郎編『明治漢詩文集』〔明治文学全集 62、筑摩書房、1983 年〕所収）
・猪口篤志『日本漢文学史』（角川書店、1984 年）
・西村時彦（号は天囚、成斎の門下生）編「成斎先生行状資料」（『重野博士史学論文集』上巻〔雄山閣、1938 年〕所収）
・小牧昌業撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」（『重野博士史学論文集』上巻、『成斎先生遺稿』所収）